

# 日吉ダムの濁りの状況について (平成30年7月13日)

日吉ダムでは、活発な梅雨前線の停滞(7月4日～8日)による出水に伴い濁水が貯水池に流入しました。

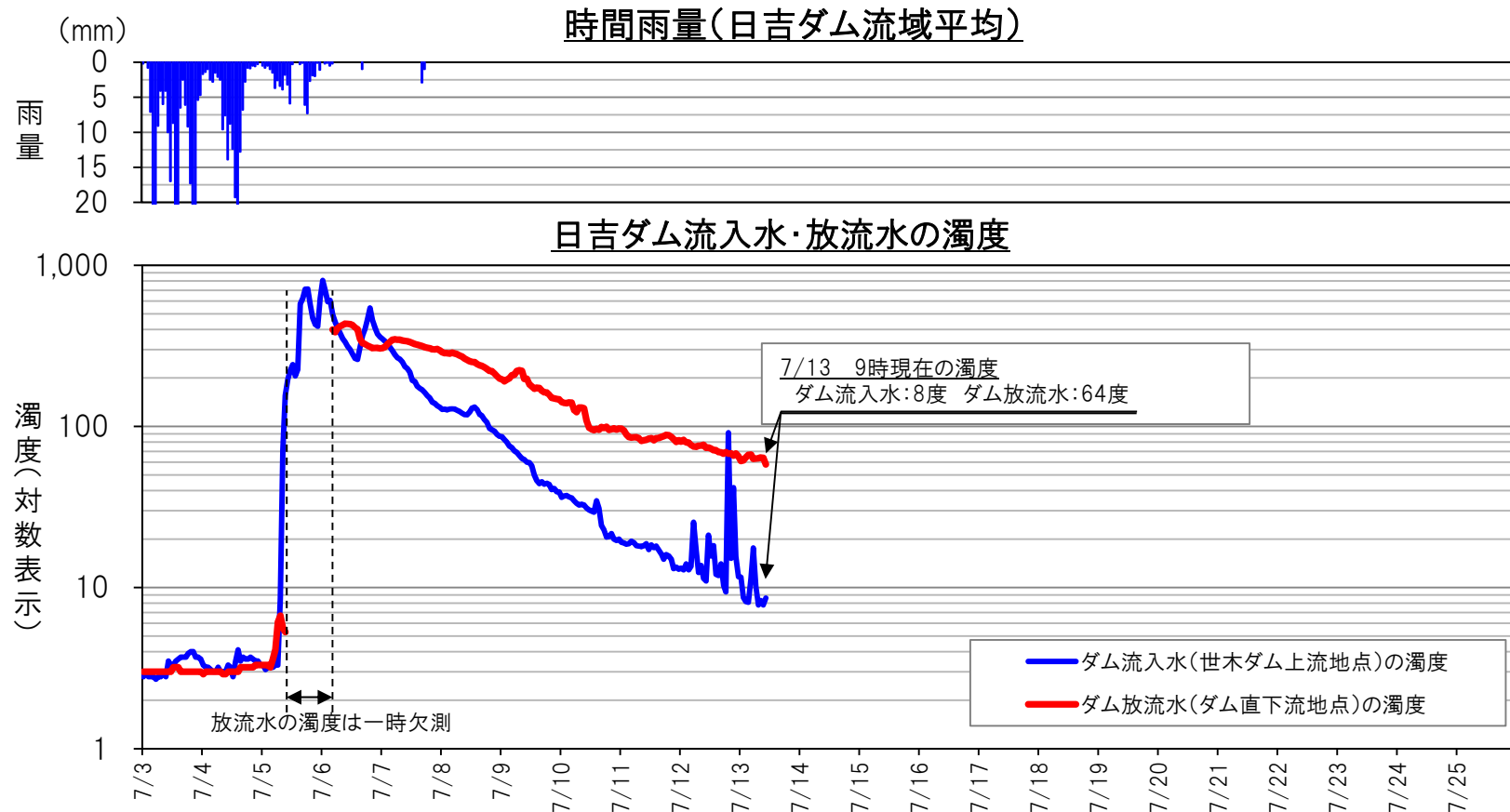
7月13日現在、貯水池に流入する水の濁りは解消されていません。同様に、貯水池及びダムから放流する水の濁りが続いている状況です。

貯水池及びダム放流水の濁りは、出水による新たな濁水の流入がなければ、時間の経過とともに低減していくものと考えられます。

濁りの状況については、今後も監視を続けていきます。

# 平成30年7月13日(9時現在)までの状況

梅雨前線の停滞前の7月3日から7月13日までの降雨量、ダム流入水とダム放流水の濁りの状況は下図のとおりです。



(備考)

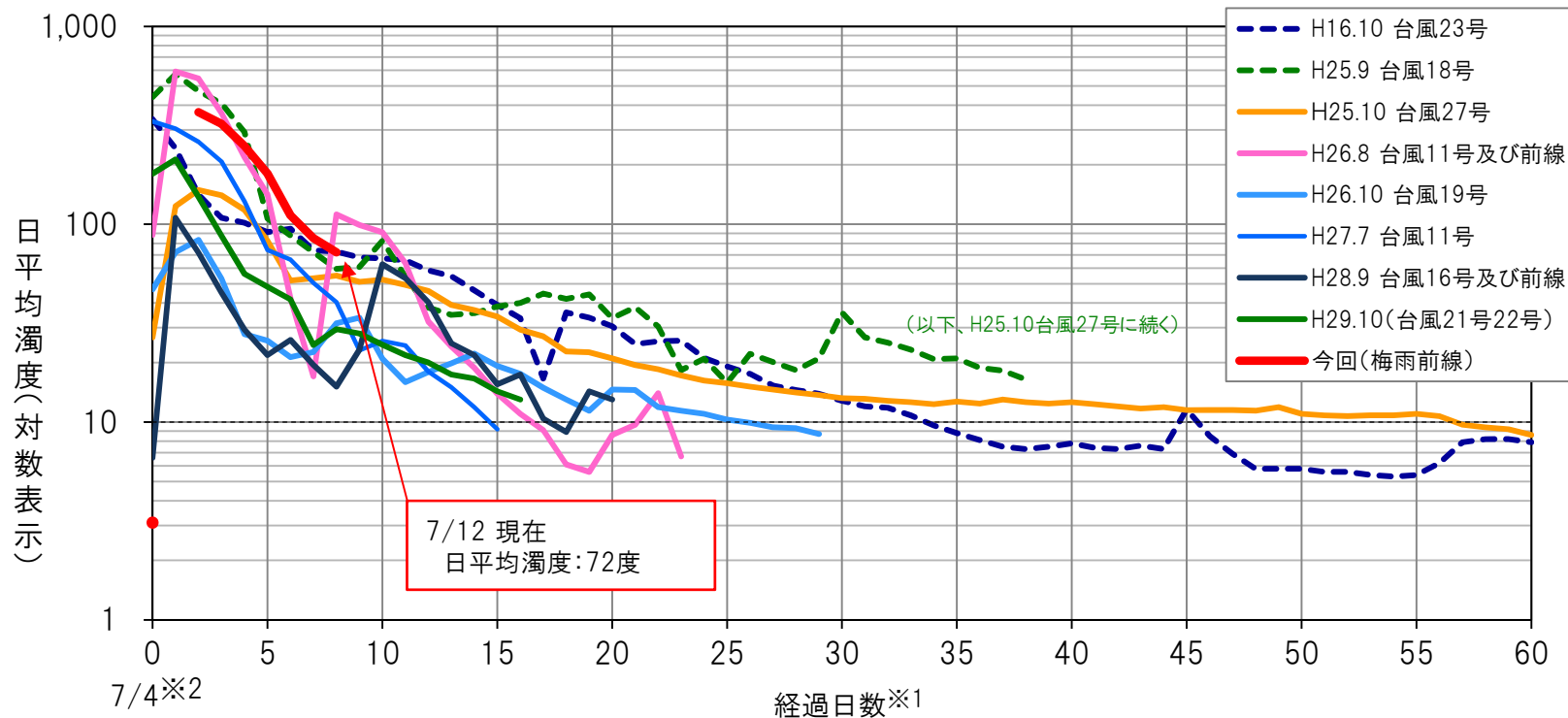
- ・「濁度」とは、水の濁りを表す指標です。「濁度1度」とは、精製水1リットルに“カオリン”という粘土鉱物を1ミリグラム溶かしたときと同じ程度の濁りです。
- ・濁りの目安として濁度が10度を超える場合を濁水としています。

# ダム放流水(ダム直下流地点)の濁りの状況

## —過去の出水との比較—

現在、ダムからの放流水は、選択取水設備により貯水池の底部から取水しています。  
ダム放流水(ダム直下流地点)の日平均濁度は72度です。

今後、ダム放流水の濁りは、出水による新たな濁水の流入がなければ、出水前のレベルまで徐々に、低減していくものと考えられます。



※1 経過日数はダムへの流入量が最大に達した日からの経過日を示す。

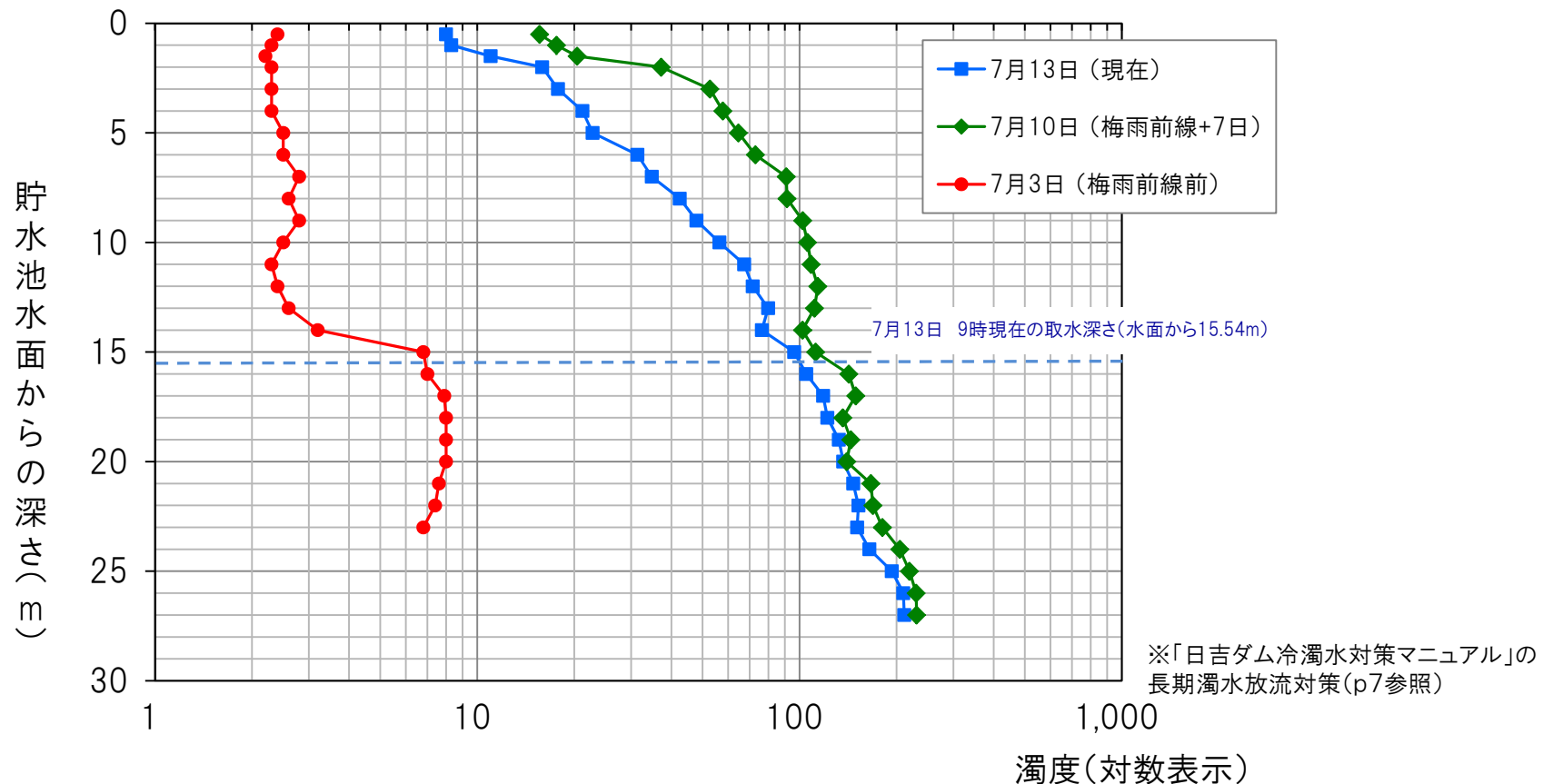
※2 日付は、今回のH30.7月(梅雨前線)出水の経過日に対応している

※3 日吉ダムでは長期濁水放流を「流入水が清澄になっても、ダム放流水が10度以上で、1週間以上継続する」と定義している。

# ダム貯水池の濁りの状況

梅雨前線の停滞前の7月3日には、貯水池の浅い層から深い層まで10度以下の濁度で推移していましたが、梅雨前線による出水に伴い濁水が流入した為、7月10日には貯水池の深い層では濁度100度を超え、浅い層でも濁度30度を超える濁りが生じました。その後、貯水池内の濁りは、濁質の沈降及び希釈により徐々に低下しています。

日吉ダムでは、貯水池内を早くきれいにするため、底部取水、「高濁度水の優先放流※」を行っています。今後、流入水が清澄になれば、選択取水設備により表層取水をおこなっていきます。



ダム貯水池における水深毎の濁りの状況(9時値)

# 日吉ダム及び上下流の濁り状況(平成30年7月12日撮影)



④日吉ダム直下



③日吉ダム貯水池



②世木ダム直上・直下



①流入河川(日吉橋下流)



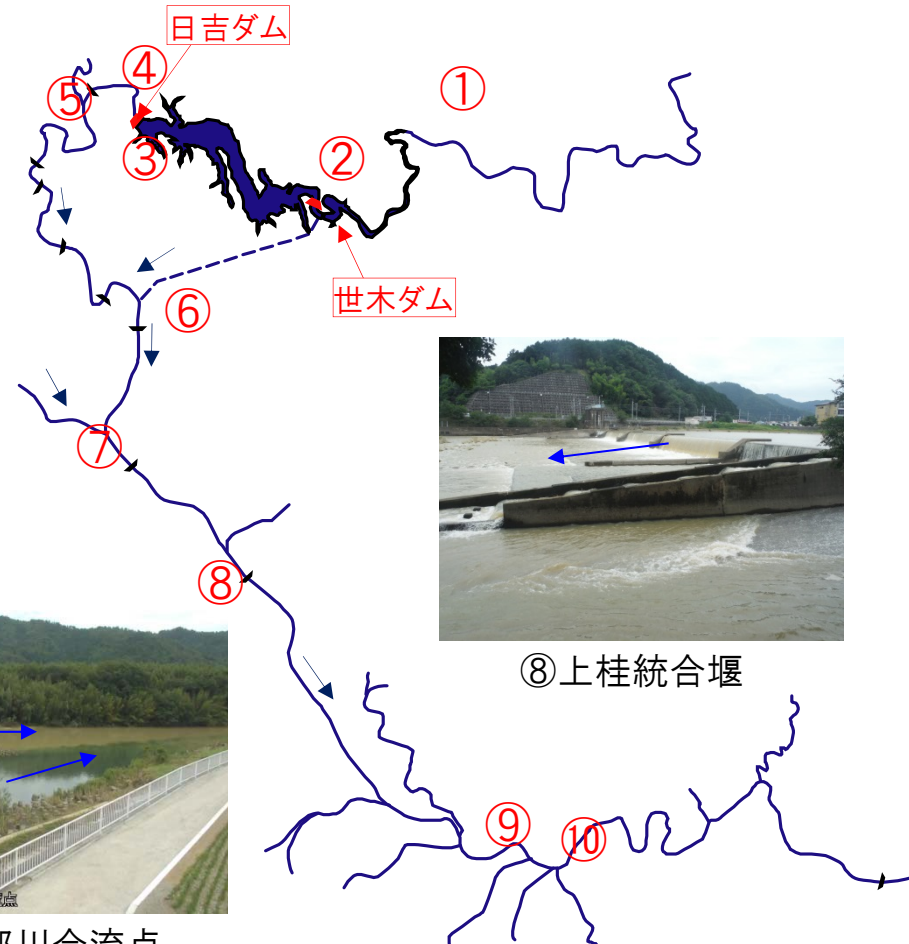
⑤田原川合流点



⑥新庄発電所  
放流口(停止中)



⑦園部川合流点



⑨保津橋上流



⑧上桂統合堰



⑩請田神社前

# 対応の状況

日吉ダムでは、学識経験者や地元自治体等で構成する「日吉ダム冷濁水対策検討会」を設置し、日吉ダムからの冷水放流及び長期濁水放流問題を議論し、平成28年に対応策をまとめた「日吉ダム冷濁水対策マニュアル」を策定しました。

長期濁水放流対策としては、以下の2点の運用を行います。

①流入水の濁度が10度以上の場合

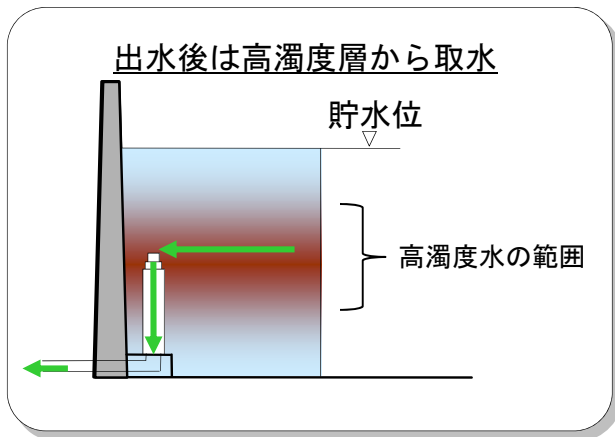
放流施設を活用した高濁度水の優先放流を行い、貯水池内を早くきれいにする。

②流入水の濁度が10度を下回った場合

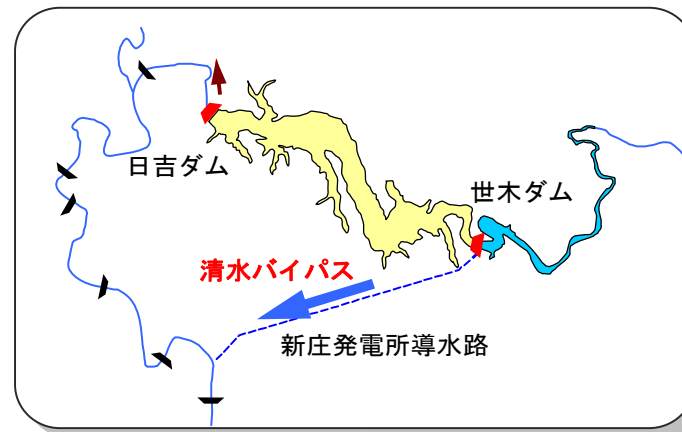
日吉ダムに比べ早く濁度が低下する世木ダムの新庄発電所取水設備からの放流を「清水バイパス」として活用し、日吉ダムからの放流を可能な限り少なくする。

※ 現在、新庄発電所は、関西電力(株)の設備更新工事のため、取水を停止しています。

① 放流施設を活用した高濁度水の優先放流のイメージ図



② 新庄発電所活用による清水バイパス効果のイメージ図



「清水バイパス」とは、上流の河川から流れてくる水をダム貯水池に入る前に、直接ダム下流に放流するための設備です。日吉ダムに清水バイパス設備はありませんが、貯水池が濁った場合には、できるだけきれいな水を下流の河川に流すため、発電用の導水路を清水バイパスとして活用しています。